

活動報告

常葉保育所 自然体験学習

3月12日、ぽかぽか陽気の中、常葉保育所の自然体験学習を行いました。今回は通常のお散歩に加えて、さまざまなものに目を配ってもらいながら、歩くことを目的としました。

立神峡公園管理棟から、おもちゃのアヒルがお散歩に出て、迷子になってしまったという設定のもと、お散歩をしながら見つけるという、普段とは違うものだったので、参加した子どもたちも目を輝かせて説明を聞いていました。

出発してからすぐに、「まだないのー」「あひるさんどこー」という声が聞こえ、一匹目を見つけた時のうれしそうな声が山の中に響いていました。「おったー」「ここにおるよー。あひるさん」赤い実の隣にいたり、空中に浮いていたり、木が根から倒されて出来た、くぼみの中にいたり、計6カ所にいましたが、集中してくれたおかげですべて見つけることができました。

今回は歩くだけではなく、さまざまなことに目を向けるので、非常に疲れたと思います。年長の児童の皆さんは小学校に上がり、年中は年長へと毎年上がっていく中、少し目線を変える事で、いつもよりさまざまなものが、違って見えるというような体験が必要と感じると同時に、これからもこのような活動を通して、氷川町の子どもの成長に貢献できるよう、尽力していきたいと思います。



▲つくし発見!

簡易炭焼き体験

3月16日、簡易炭焼き体験を行いました。一斗缶を使用しての簡易炭焼きはよく聞く方法なのですが、立神峡公園では「珪藻土（けいそうど）」ブロックを使用しての簡易炭釜を作ります。珪藻土とは七輪の材料に使われる石で、耐火性と断熱性に優れているため、建材や保温材料としても使用されているもので、30個ほど使用して釜と煙突の部分を作ります。火入れから出来上がりまで7時間ほど掛りました。取り出した炭同士を叩いてみたところ、備長炭とまではいきませんが、澄んだ高い音がするきれいな出来栄でした。



▲火入れて出来上がりを待ちます

宿泊通学ボランティアスタッフ募集

毎年8月下旬から9月中旬まで、氷川町教育委員会主催の宿泊通学体験事業が行われています。親元から離れ、自分たちで食事を作り、お風呂を沸かし（立神峡公園里地屋敷のお風呂は五右衛門風呂です。）、母屋と納屋で宿泊しながら学校に通学する活動です。



- ◆募集人員：5人程度(高校生・大学生・社会人など)
- ◆お問い合わせ・お申し込み先
立神峡公園管理棟 担当 志水 ☎62-1543

竹ドーム製作講習会

里山保全の一環として、竹林の間伐を行い、間伐材を使用しての竹ドーム製作を行います。竹ドームは、組み上げると側面と天井面に星を形作るドームです。間伐したその場で単独・少人数での組み立てが可能であり、作業場所やイベント時の休憩所設置など多用途で、災害発生時なども非常に有効になります。これを機会に講習会に参加してみませんか。

- ◆日時：4月20日（日）9時～15時
- ◆参加費：3,000円（講習費・保険料・材料代）
- ◆募集人員：5人
- ◆持参品
長袖の服・長ズボン・長靴（竹やぶなどに入ります）・帽子・軍手・昼食・水筒

お問い合わせ・お申し込み先
立神峡公園管理組合 ☎62-1543 tategamikyou@yahoo.co.jp（8：30～17：30 火曜定休日）

町民文芸

短歌

望めども貌はおいらに時せがみ
勝手に造作変えやがる
法道寺 本田 花風

早朝のお茶一杯の美味いこと
白板に今日の予定確かむ
北野津 宮本 末秋

春うらら寄せくる波の音さやか
波音しきり夕照の浜
高塚 桑原ゆき代

清濁を合はせ飲み込みただだに
広がりてをり不知火海は
吉本 高橋 澄子

ほろ苦き思い出なれど青春を
下駄ばきモンペ戦下なれば
西野津 古崎スエノ

老うごとに亡母に似て来しと人は言う
鏡に映せし我の今日
南鹿野 尾崎 京子

障子越し夜の白みしを覚ゆれど
あとしばらくと枕引き寄す
吉本 橋村 正之

春日和光となりて青海の
漁船をめぐる鷗の群
西野津 古崎 栄子

俳句

お別れは弥生桜の真盛り
そつと手を振り笑顔明るく
高塚 竹中 力

わだつみの沖に不知火もゆる国
北帰の鶴は天空に舞ふ
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

金柑の甘露や亡母の忌も近し
北野津 宮本 末秋

パンジーの花小犬の顔によく似たり
高塚 桑原ゆき代

黒猫の昼寝に春陽惜しみなく
吉本 高橋 澄子

菜の花やぎようぎ店有り田舎みち
西野津 古崎スエノ

ひな灯り孫娘のはほも紅に染りて
南鹿野 尾崎 京子

木の芽晴れポケット膨らむ路の薔
西野津 古崎 栄子

惜しみなく菜の花咲きし干拓地
町 香山菊童子

音もなく春雨の降る屋下がり
町 香山セツ子

老木の梅は満開新築家
高塚 竹中 力

幾世経し山河たたえて桜東風
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

鳴外論：黙あるに若かず【前編】

法道寺 本田 花風

「黙あるに若かずとおもへど批評家の
餓えを恐れたまさかに書く」
スバル五号（明四二）に載せるため
一気に書き下ろした「我百首」の一
首。彼は当時観潮楼主人として、歌
壇の颯風の、眼だった。と記されて
いる。

若かりしころ、文力及ばずよく理解
できず、とある大学の文学部に問い
合わせのところ、関係の先生が不在
で明日教室会議がありますので確認
できるが、このまま素直にとって良
いのではないでしょうか。「黙って
いるに越したことはないと思うけれ
ど、それでは批評家が、批評対象と
するものにこまるだろうからたまに
は書く」

【次号、後編へ続く】

替え歌シリーズ

風雪ながれ旅 北島三郎

吉本 橋村 正之

破れかぶれの最後の馬券
是が見事に大穴で
払い戻しのお札の厚さ
夢でないかと頬抓る
アイヤーアイヤー
だから競馬は止められぬ

金が無ければ勝負は出来ぬ
なんとしても軍資金
家に有るもの目ばしものを
持つて馴染みの質屋にと
アイヤーアイヤー
夢を見たいさもう一度

鍋の焦げ飯こさいで食って
三日前から水ばかり
ツキの無い時こう言うものさ
だけど競馬は止められぬ
アイヤーアイヤー
泣いてくれるな腹の虫

投稿いただきます作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。